

若松地区町会連合会「箱根山駅伝大会」

団体名称	若松地区町会連合会
事業名	箱根山駅伝大会
助成対象事業区分	分野別モデル事業(スポーツ振興事業)
事業実施期間	平成21年7月8日～平成22年3月31日

町会・自治会の概要

団体名称	若松地区町会連合会	設立年月日	昭和40年4月1日
構成団体数	16団体 (平成21年10月末現在)	構成世帯数	10,266世帯 (平成21年8月末現在)

【事業の概要】

- ・若松地区内にある箱根山をめぐる駅伝コースを設定し、小学生から60歳代くらいまでの年代を対象とした駅伝競走を実施。競技は「若松地区内16町会対抗戦」と、新宿区内在住・在学・在勤の「一般参加」の2種類。
- ・「若松地区内16町会対抗戦」は、各町会5名で構成されるチームで実施。また各チームは、小学生、中学生、高校生、大人、高齢者それぞれ1名ずつで構成することとした。
- ・「一般参加」については、年代区分は行わない5名構成のチームとした。
- ・ランナー1人が走る距離は約8～900m。ただしアンカーのみ1200mを走るコース設定となっている。走者の順番は各チームが自由に決められる。
- ・駅伝大会に付随して、「新宿いきいき体操」や「パン食い競争」を実施した。

当町会連合会は、若松地区の町会及び自治会が、交流の緊密化、連携することにより地区全体の向上・発展を実現すべく結成された団体である。当町会連合会が活動する地域の特徴として、他の地域と比較して大規模な施設が多く所在していることが挙げられる。例えば国立国際医療センターや東京女子医科大学病院などの医療施設などが地区内に所在している。

また、戸山地区とそれ以外の地区とは少し性質が異なるといえる。戸山地区には都営アパートがあり、自治会の加入率は100%近いと考えられる。

町会・自治会の加入率については、少子高齢化の影響もあり、今後少しずつ減少していく可能性がある。

助成を活用する取り組みに至った背景、問題意識等

近年、全国的な傾向と同様、若松地区においても少子高齢化が進んでいる。それに伴い、老年世代と若年世代のコミュニケーション不足が感じられるようになっていた。このため、地域にどのような人がいるかを把握することが困難となり、地域の結束力がだんだん弱くなってきているという問題があった。

「箱根山駅伝」の構想は数年前からあったのだが、実現には至っていなかった。しかし昨年度、東京都の「地域の底力再生事業助成」があることを知り、箱根山駅伝実現のために応募することとなった。若松地区町会連合会内の各町会は例年盆踊りや研修活動等を各々実施しているが、このような連合会で取り組む事業は初めての試みであった。

事業を実施する上での問題点、創意工夫を行ったところ

当事業を実施する上で、各町会で実施の合意を得るまでに時間がかかった。もともと「地域に箱根山があるのだから、箱根駅伝をモチーフにして箱根山駅伝をやろう」という冗談から始まった企画でもあり、実施前には何度も協議する必要があった。企画の合意を得ることができた背景には、長年にわたって行われてきた若松地区町会連合会の地道な取り組みが果たした役割が大きいと考えている。企画が決まってからは、一气呵成かつスムーズに実施までこぎつけることができた。

企画開始後、早い段階で公園を管理する団体に手続きを実施した。このような事業で手続きを行うのは初めてだったため、手続きには当初の予想通りやや時間を要したが、スムーズに許可を得ることができた。

また、各町会でチームを作るのが大変であった。普段密接なつながりが必ずしもなかったという町会も多かったため、町会にどんな人がいるかわからなかったことが原因であると考えられる。リーダー的役割を担っている人がいる町会は、すんなり決められたようだ。

また、予算が限られており、お弁当や飲み物が十分に配れないといった点を考慮し、午前中のみで全てのプログラムを消化できるよう計画した。

加えて、チラシやパンフレットのデザインは副会長が実施する等、手作りのイベントという面を強く意識した。

東京都による助成が役立った点

東京都の助成は、財政面で大きな貢献があったといえる。設営の面では特に助かった。駅伝のスタート地点には立派なアーチを作成し、大会の雰囲気作りに大いに役立った。

またイベント開催のノウハウを蓄積することができた。これは今後のイベント活動に不可欠なものであると考えている。

今後の助成事業の活用

今回の助成活用により、大きな成果が得ることができた。1回だけのイベントではなく、継続的な地域活動とするため、是非今後も本イベントを実施していきたいと考えている。ただし、第1回大会が成功に終わったことから、次回大会をグレードダウンさせることは出来ないと考えており、現在プランを練っているところである。金銭面での課題もあるが、なんとか次回開催につなげていきたいと考えている。

特に、イメージの継承という面は、特に気を配っていきたいと考えている。地域のつながりを築き、みんなが参加することができるような工夫を今後も盛り込んでいく予定である。これからもこのイベントを続行し、自立したイベントとするために努力していきたい。